元気いっぱいに第２クォーター開始！

７月に入り、第２クォーターがついに始まりました。
今学期もどうぞよろしくお願い致します。
約二週間あったクォーター休みで十分に英気を養う事はできたでしょうか。
休み中にも、Venture fourth にお便りが届いています。
その中から一通、紹介させていただきます。

渡辺先生
いつもありがとうございます。
大和魂あふれる通信を読ませて頂き様々な思いが頭に浮かび胸が熱くなりました！
お金を払えば相応のサービスを受けられる。という事が当たり前になるとコスパだけが判断基準になってしまい、その裏にある事柄やそのサービスを支えてくれている人に目が行き届かず、そのサービスの本当の価値に気付けなくなってしまうと思います。

子供達が富は足るを知るにあり…を実感して周りの人との調和を楽しみ豊かな人生を歩んでくれたら最高です(^^)
毎日の給食を美味しく美しく食べてもらう為に、子供達には、たくさん学び・活動して『空腹は最高のソース』を実践してもらい、大人達は食を通して学びの機会が持てる自校調理（委託調理）ができる仕組みと設備を整えていけたら…とおもいます！
全てはみんなの笑顔の為に(^^)

PN.コレパパさんより

「大和魂あふれる」との書評、とっても嬉しいです。
「空腹は最高のソース」も、素敵な言葉ですね。
コスパだけが判断基準になってしまう事の危惧は、私もコレパパさんと同様にずっと強く持ち続けています。
そして、それは教師になりたての頃より、現在の方がずっと強くなりました。
それくらい、「不便さ」が子どもたちに与える学びは絶大であり豊かであることを実感し続けてきています。
以前、アフリカのセネガルという国と交流学習をしたことがありました。
その時の様子を、当時の通信から抜粋してみます。
＝＝＝＝＝＝＝引用ココカラ＝＝＝＝＝＝＝
日本との時差はおよそ９時間。
イスラム圏であり、生活の様子は日本と大きく違っている。
そのセネガルの文化や風習について、現地の友人が書いた通信を活用しながら学習を進めることにした。
一つ一つの風習や文化を見聞きする度、教室では驚きの声が上がった。
その中の一つが、「生きた鳥を買ってくる」というものだった。
ラマダン（断食月）を終えた後、イスラム教では「コリテ」というお祭りが開催される。
そのコリテでは、鶏肉を調理して食べる習慣があるそうである。
友人がホームステイしていた先でも、鶏肉料理がふるまわれたとのことだった。
せっかくなので、現地で友人が書いた通信から抜粋で記事を紹介する。

ここではとり肉といっても、スーパーのように切り分けて売られているわけではありません。生きているニワトリを買ってきて、自分たちでニワトリをしめて、切って、焼いて食べます。ですので、とても準備に時間がかかります。
私のスティ先はキリスト教でしたので、友達のイスラム教の家庭におじゃましました。そこでは、前日から準備をしていました。写真のように豪華な料理ができました！1ヶ月断食をした後のごちそうはきっと格別でしょうね。また、「コリテ」では、こんな習慣があります。

- **新しいセネガルの服を作り、この日に着る。**
- **子供たちはお金をもらいに家をまわり歩く。（お正月のお年玉に似ています。）**

・ **作った料理を、他の家庭にもおすそ分けする。（キリスト教の家庭にも同じく。）**

スティ先の家族は、「セネガルではイスラム教もキリスト 教も仲良しだから、“コリテ”の日はイスラム教の家庭 が私たちにもごちそうしてくれるのよ。」と言っていました。とてもすばらしい文化ですね。また一つ セネガルの良さを見つけた気がします。

読み終えた後、子どもたちからすぐさま質問が上がった。

「『鳥をしめる』ってどうやってやるんですか？」

驚いたことに、全員がやり方を知らなかった。

そこで、冒頭の大学生の頃の話をしたわけである。

しめ方を聞いて、多くの子たちが表情を曇らせた。

「えっ・・・」

「そんな風にするの・・・。」

実際に見たわけではないのに、クラスがシーンと静まり返った。

学習を進めながら、こちらも新たな発見をした思いだった。

本当に、子どもたちはパック詰めされたお肉がどのようにして作られたのか知らないのであった。

いい機会だと思ったので、次の質問もしてみた。

「鳥をしめる体験をしてみたいと思う人？」

手が上がったのは、１０人ほど。

後の子たちは、見るだけならギリギリ大丈夫かもしれないとのことで、数人は「見るのも絶対無理！」と答えた。

けれども、全員そろって「唐揚げは大好き！」と答えるのである。

限られた時間であったが、次のことも補足しておいた。

日本もかつては、各家庭で鳥をさばいていたこと。

気持ち悪い、残酷と思うかもしれないが、誰かがそれをしてくれているからこそ、唐揚げやとんかつが食べられるという事。

セネガルではそれが当たり前のことであり、お手伝いで鳥をしめることもあること。などなど。

子どもたちは、交流学習に向けて、セネガルの風習・文化にさらに興味をもった様子だった。

＝＝＝＝＝＝＝引用ココマデ＝＝＝＝＝＝＝

ここから先の展開は、自分の本に詳しく記しましたが、子どもたちはセネガルの文化を知れば知るほど、「命」について興味を持っていきました。

そして、最終的には、全員が「鳥をしめる体験をしてみたい」とまで言うようになったのです。
私は、子どもたちの「知りたい」「学びたい」を体現するべく奔走したわけですが・・・この後が気になる方は一度拙著を読んでみて下さい(笑)
つまり「十分に満ち足りた状態しか知らない」と、コレパパさんのおっしゃるように、そのものがもつ「本当の価値」に気づけなかったり、「感謝」という大切な感覚が分からなかったりするという状態が生まれてしまうのです。
だからこそ、現代の教育場面においては、不便や不足という状態を意図的に組み込んでいく必要があるのだと思います。
そして、その必要性は昭和の頃より令和の方がずっと高くなっていることも間違いないでしょう。
今回の宿泊体験も、そうした背景も多分に影響している側面は間違いなく存在します。
きっと、島での体験は思った以上に大変なこともあるでしょう。
自分たちだけで乗り物を乗り継いで島に行くことは、文字通り大冒険です。
魚やタコを取ってさばくことも、喜ばしいと感じる子たちばかりではないはずです。
でも、そうした不便さの中で、命の大切さを学んだり、日頃の便利さの価値に気づいたりする場面が自然と生まれてくるはずです。
そして、自分たちがどれだけお家の方々にお世話になって生きているかを感じるシーンも出てくるのではないかと思います。
もちろん、学校初の行事に向けて、担任団も毎日奮闘中です。(笑)
日常の学校を飛び出して、非日常の島で学ぶこの３日間。
貴重な学びと経験を得て、一歩逞しくなって帰ってこれるように体験を支えていきたいと思います。
改めて、第２クォーターもよろしくお願いします。

☆↓読者ページはこちらから↓☆ご意見ご感想など気軽にお寄せください

https://docs.google.com/forms/d/1qqf4cPLcjpcWaimWdu-6lFM73JahODYK4ROldg7jLxM/edit